



陰翳礼讃的建築の設計 — 谷崎潤一郎「陰翳礼讃」に見られる空間記述と「ブルーノ・タウト」の言説との参照から



陰翳礼讃 谷崎潤一郎著

背景 「陰翳礼讃」

「美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや、明暗にあると考える」
 『陰翳礼讃』 谷崎潤一郎より引用
 『陰翳礼讃』は日本独自の美しさをその陰翳の中に見だし、多方面の文化を対象に書かれた谷崎潤一郎による随筆である。建築もその一つとして描写がされているが、その陰翳とは一体どのようなものなのか。本設計は陰翳礼讃に描かれた空間像の陰翳美、実体を持つ建築として体現する試みである。
 陰翳礼讃の中で谷崎は「日本が西欧の文化に沿って開発の歩みだしたときに、異住万差するより外に仕方がないが、日本に譲られた文化的な損失は覚悟しなければならない」と述べ、当時西欧文化の流入によって、既に日本の伝統的な文化が失われつつあることを危機感を持ちながら指摘している。
 そのように昭和八年という近代主義が日本に丁度迫りくる時代に、日本的な建築空間を斬やかな文章で表現したこの陰翳礼讃の中に描かれた空間を体現しようとする試みは、その近代というものが完全に浸透したと言える現代において日本文化の再発見という示唆を含んだ意義のある研究に位置づけられるだろう。



Bruno taut ブルーノ・タウト

陰翳礼讃との比較対象 「ブルーノ・タウト」

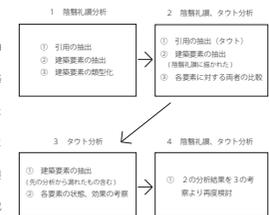
陰翳礼讃の中に描かれた空間を考察するための手法として、本研究では、陰翳礼讃の中から得られた空間把握とブルーノ・タウト（以下タウト）の著書による言説とを参照し、分析を行う。
 陰翳礼讃という文章をタウトという他者の言説と照らし合わせることで、その空間がどのように存在するのか、考察するための手がかりとする。彼を選定した理由は右記の三つによる。
 このように近代主義が完全に浸透していなかった当時の日本において、現代にも通じる客観的な陰翳礼讃との比較、参照が可能な発言をしているということとを分析対象として選定するための条件とした。
 当時の日本の伝統的な美しさを持った空間を探るにあたり、それを斬やかに描写した陰翳礼讃と同時期に活躍し、現在では日本に浸透してきた近代主義の価値観を前提に、視物を体験しながら日本の建築空間を評価した彼の言説を参照することは、現代という時代においてこのような研究を行う際、手がかりとして非常に有効なものと考えられる。
 本研究では、彼が日本をどのように評価し、日本建築をどう近代主義に継承したのかという点における分析、考察の結果を日本の建築表現として、陰翳礼讃との参照を行う。

「ブルーノ・タウト」の選定に至った三つの条件

- ① 近代主義者である（と思われる）こと
- ② 外国人である（日本の伝統を背景に持っていない）こと
- ③ 陰翳礼讃が刊行され評価を実質的に受け始める年代以前に日本を評価する活動を行っていること

研究における分析の流れ

本研究は主に四つの分析から成る。
 まず陰翳礼讃の建築記述の引用から建築を構成する要素を抽出し、それを類型化した。
 そしてタウトの言説から陰翳礼讃との比較を前提とした建築要素を抽出、同様に類型化し、両者の比較分析を行う。
 次にタウト個人の日本建築評価を、具体的に明らかにするため、彼個人に対して同じ方法を用いてより詳細に分析を行う。
 そして最初の分析から見出した陰翳礼讃とタウトの共通点に対して、タウト個人の日本建築評価を探った分析を前提とし、最終的にそこから陰翳礼讃に描かれた空間を構成する建築要素を抽出する。
 これら一連の分析から、陰翳礼讃に描かれた空間像を再構成する。



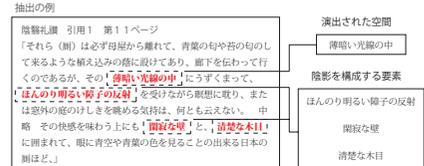
分析1 陰翳礼讃に描かれる空間

陰翳礼讃における空間記述の抽出

陰翳礼讃に描かれる空間を把握するために、本文から建築、空間についての記述を本文中から全て抽出した。建築に関する語が含まれていることや、その文の中心に建築、空間が置かれていることをその基準としている。結果1-2の文章が抽出できた。

これらの引用の中から本文中に演出された空間と、その陰影を構成する建築的要素とをそれぞれに分類することで、陰翳礼讃の文章の中で存在した空間とその陰影がどのように生み出されているかをより明確にする。

引用1の場合、この方法を用いると、演出された空間は「薄暗い光線の中」となり、その陰影を構成する建築的要素は「ほんのり明るい障子の反射」と「閑寂な壁」と「清楚な木目」というように分類できる。これを引用全てに実践し、表とまとめた。

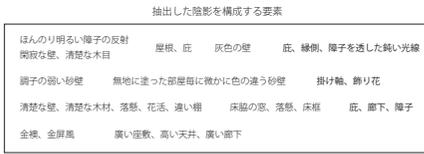


陰影を構成する要素の類型化

抽出した「陰影を構成する要素」を類型化し、それが何であり、建築を構成する部分のどの部分に当たるのかをそれぞれに対して明確にする。

この項目では、これらの分析結果を後述したタウトの言説との比較分析を行うことを前提とした類型化の方法を提案し、それに基づきながら分類を行う。

近代を背景に持ったタウトとの比較を前提とした類型として「建築構成要素」、「空間構成」、「材料」の三種類、詳細には六種類の類型を設定した。



この分析の結果、「構造要素」と「建築全体の空間構成について」ほどの要素も振り分けられなかった。この二つは類型の中でも建築全体を決定するに欠かせない要素である。このことから陰翳礼讃の中で各巻は建築全体ではなく、ある空間単位の中に断片的な空間美を見出し、陰翳礼讃の中にもその空間性を描写したのではないかと考えられた。

分析3 ブルーノ・タウトの日本建築評価

言説に見られる建築を構成する要素の類型化

そしてここからはタウト個人の日本建築評価を明らかにするために、陰翳礼讃とは直接関係のない、先述の分析で対象から漏れた言説も加え、網羅的に分析を行う。彼がどのような評価基準を持っていたのか、より具体的に評価したものは日本建築においてどのような意味があったのかを知る。

先に行った陰翳礼讃の分析と同様に、同じ類型を用いて引用の中の建築要素を分類する。今回は発見できただけ三つの引用から、二十個の要素とそれらにおける六十種類の効果、状態が確認できた。

そして今回も先述の分析と同様のように、各類型に振り分けられた建築要素がどのような効果や状態を示しているのかを下図に記した。その結果、最も多くの要素が抽出されたのは類型1-2の非構造要素であったが、1-1の構造要素、2-1の平面構成について新たにいくつかの要素が抽出された。また類型2-2の特定の窓、機能を持った空間については要素一つあたりの記述が他と比べて多い。類型3の材料については依然と記述は少ない。

ブルーノ・タウトの日本建築評価体系

これらの分析結果から、本研究ではタウトの日本建築評価は「建築構成要素」として「空間構成」という枠組みにおいて体系づけられると考え、この二つの類型を「ブルーノ・タウトの日本建築評価体系」と定めた。

また日本に唯一一巻の田辺尚江郎において、同様の分析を行った結果、それまで分析結果とは大きく異なるものも新たに、既往研究や田辺尚江郎の特殊な建築経緯を基にした分析結果を参照しないこととした。



分析結果の傾向から定めたブルーノ・タウトの日本建築評価体系



分析2 「陰翳礼讃」と「ブルーノ・タウト」の比較分析

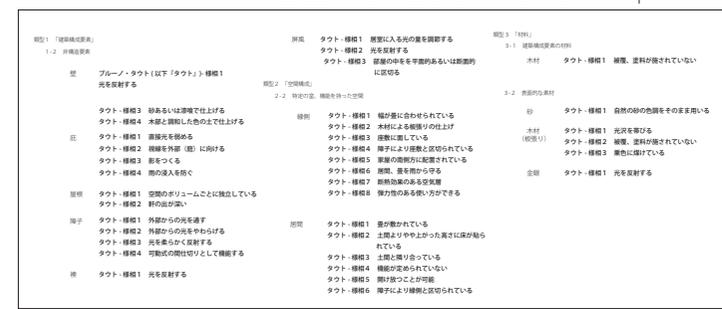
両建築評価の共通点

分析1で得られた結果に対してタウトの日本評価には共通点が存在するのを彼の著書から探る。陰翳礼讃では建築の機能や特定の場所、地域という点を特定せずに、日本建築の魅了について記述がされていることから、タウトの言説についても明確な特定がなされていない日本建築について述べて言説を対象として分析を進めた。

前項の陰翳礼讃に対して行った類型化と同分類をタウトの著書の中に登場する建築構成要素に対して行い、「陰影を構成する要素」と同一のものを見なせる建築要素が生み出している効果やその状態に直し注目し、記述した(下記図)。それらの効果、または状態を、「陰影の美を構成する要素における建築的相組」として定義する。この分析から十二個の要素における三十五種類の効果、状態が確認できた。

次にここで定義した陰影の美を構成する要素における建築的相組に先記した陰翳礼讃の引用の中に表れているかどうかが分析する。ここではこの要素と相組の組み合わせを、陰翳礼讃とブルーノ・タウトの共通点として「陰影の美を生み出す建築的構成(タン)」と定めた。

ブルーノ・タウトの著書に記述された「陰影の美を構成する要素における建築的相組」



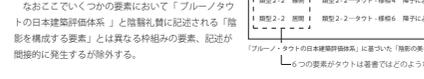
分析4 両者の共通点の抽出と建築設計への展開

陰影の美を構成する日本の建築表現

分析の中で定めた「陰影の美を生み出す建築的構成(タン)」は陰翳礼讃から抽出した陰影を構成する要素と、タウトの著書の中で述べてそれと同一の要素が示す状態の組み合わせであり、前提で定めた「ブルーノ・タウトの日本建築評価体系」とは、タウトの著書の引用に対する分析の結果から、日本建築の二部分の間接的に評価したか、引用中の日本建築要素に対して表したものである。

そしてこれらの要素がタウトの言説ではどのような効果、状態を示していたか、先述の分析結果を基に再度抽出し表に記した。

なおここでいくつかの要素において「ブルーノ・タウトの日本建築評価体系」とは異なる特組みの要素、記述が間接的に発生するが除外する。



設計手法の変換

一連の分析結果から定めた「陰影の美を構成する日本の建築表現」を設計の中実現することを試みる。

その手法として、六つの建築要素をその十八種類の効果、状態に基づき抽象的な建築構成要素、または建築構成法へと変換していく。変換の際には、各要素の効果、状態を生み出すことに重点を置いた。そのように変換された要素、構成法を設計の中に取り込み、建築を構成する。

その抽象的に変換された建築構成要素、構成法を図式化し、変換前の「陰影の美を構成する要素」と合わせて記した。

この設計手法の具体性を持った建築設計へ応用可能性と有用性、そしてそこによって日本固有の陰影を身体として実現できるかというところを詳細に検証するため機能性を軸として設計を進めることとした。

この設計とその建築への考察を以て、結論とする。

建築設計

住宅機能の決定

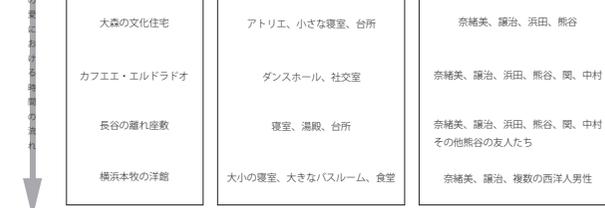
陰翳礼讃的な住宅の設計にあたりその機能、規模、敷地などの諸条件を決定するが、陰翳礼讃に描かれた空間イメージに適合するものとして、今回は原著者による代表作「商人の愛」にそれらを委ねることとした。

「商人の愛」



「商人の愛」は1924年3月から1925年7月までの間に「大阪朝日新聞」と雑誌「女性」の中で掲載された小説である。大正期の日本における西洋文化の流入や、男女間の性的関係が全体的に解放的な方向へと変化しつつあった社会とを背景に、主人公河合隆治が赤緒美という一人の女性によって作者自身と破滅するまでの半生を描く物語である。現在でも文庫化や改定版の出版、またそれと異なる訳者によって三度に渡って映画化がされるなど、谷崎の代表作として認知されている。

「商人の愛」の中に描かれる赤緒美は物語の中で絶えぬ魅力的な女性として描かれるが、その美は男性を虜にする妖嬈である。にやにやと彼女が常力であり、その妖嬈なまでの描写は「陰翳礼讃」に描かれる日本建築の姿に似通うように思えてならない。谷崎潤一郎によって表現された「陰翳礼讃」の光と影による陰翳美の世界と「商人の愛」の赤緒美による凄美な世界は、統合され表現されるにふさわしい題材ではないかと考え、今回はそのように試みに至った。

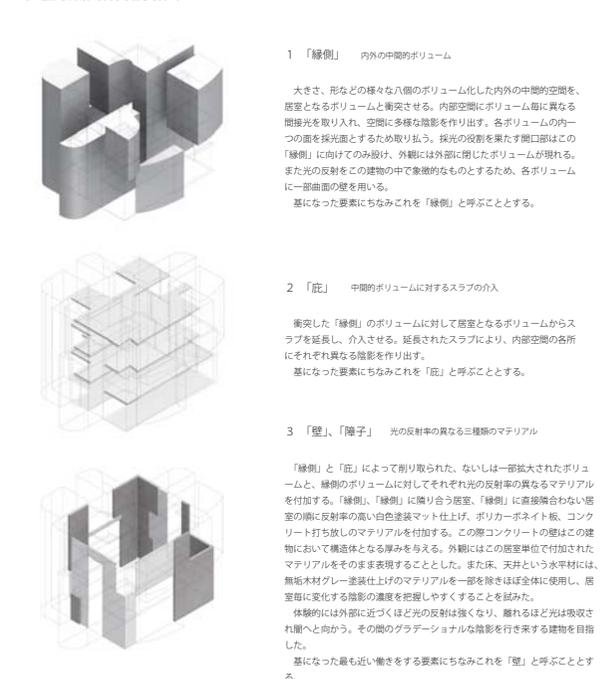


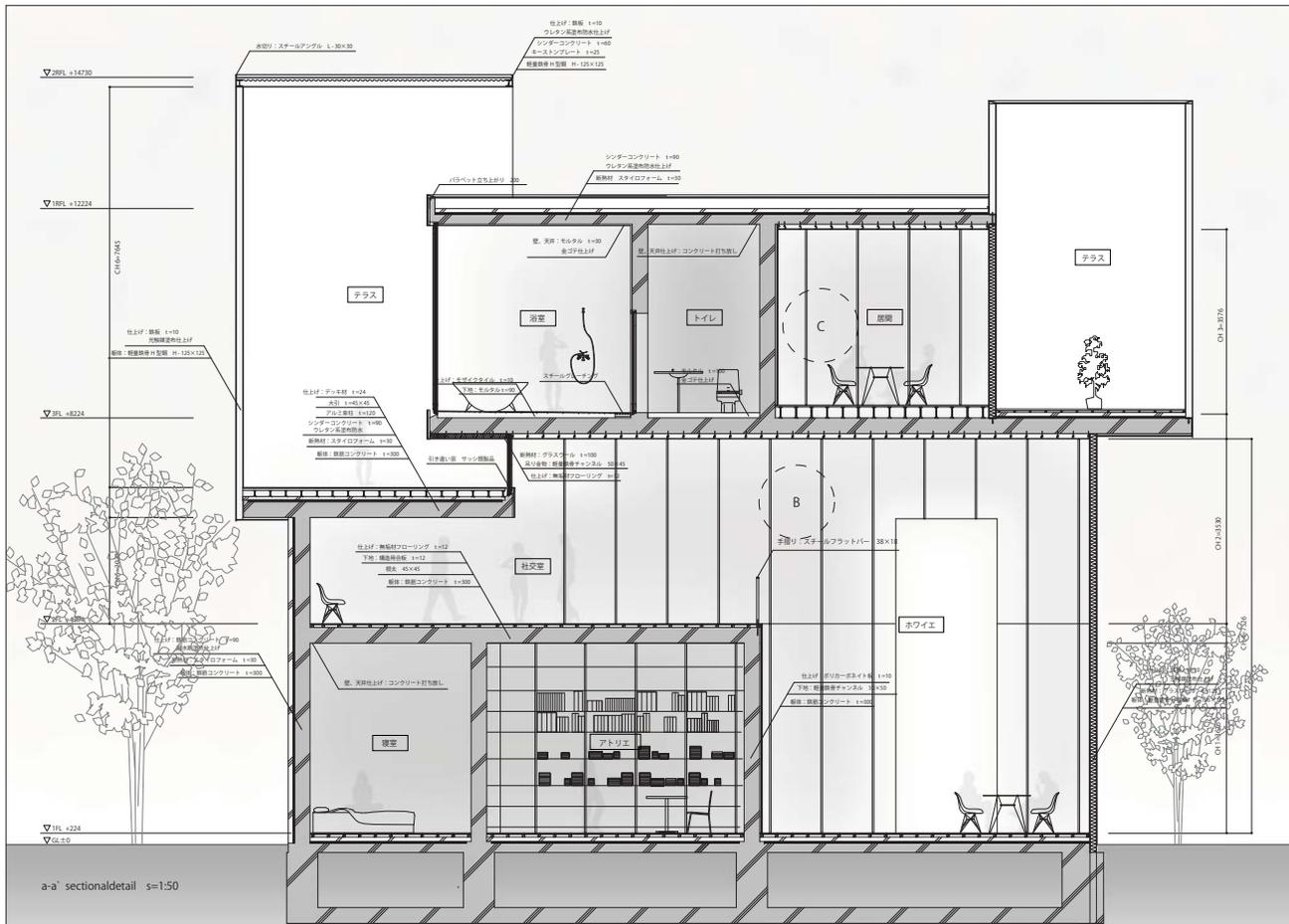
本設計ではこのように並べた時間軸、場所、機能、登場人物を踏まえ「商人の愛」の物語を住宅内で補充する機能、規模、を設定し、形態決定の項目で示した方法により全体を構成する。

以上のことから、本設計による住宅を「赤緒美と彼女を取り巻く男性達の世界」とし、敷地を設定しない架空の物とする。

建築形態の決定

分析から得られた四つの建築構成要素、構成法を、さらに具体的に形態を決定する三つのダイアグラムへと変換した。三つのダイアグラムはそれぞれ陰影を構成する異なる働きを持つ。





①一階ホワイエ吹き抜けから二階社交室を見る 陰影を構成する要素 ①「縁側」 ②「庇」 ③「壁」

社交室では二階に対して上のように配置された採光ボリュームである上階のテラスから間接光が差し込むように計画した。
テラスのボリュームに対して三階のスラブが介入し、二階に差し込む光を弱める。弱められた光は開口部に接するポリカーボネイトに反射し、全体に深い陰影を演出する。テラスにより天井高が低くなるに伴い、壁のマテリアルもコンクリートに変化し、さらに深い闇と相まって三階へと向かう。



b-b' section s=1:100

c-c' section s=1:100



①三階居間からテラス側を見る 陰影を構成する要素 ①「縁側」 ②「壁」

三階居間には端部にテラスとしての採光ボリュームを配置した。ここから内部に入った光はポリカーボネイトや一階ダイニングの吹き抜けから延長した別の採光ボリュームの壁に反射し、それを繰り返しながらコンクリートで閉じられた三階のトイレへと向かう。反射を繰り返す中で徐々にその陰影に深みを増していく。

